

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19401036

研究課題名（和文） 日常実践におけるマヤ言説の再領土化に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Re-territorialization of Mayan Discourse in Daily Practices

研究代表者

吉田 栄人（YOSHIDA SHIGETO）

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授

研究者番号：10240285

研究成果の概要（和文）：本研究では、外部社会に対して語る優位なポジションを持たないマヤの人たちの日常生活において、外部の社会によって消費の対象として整形され直したマヤという文化がいかにマヤの人たち自身によって獲得され、かつ彼らのものとして領有されるのかその可能性とプロセスを、トゥルム市（メキシコ）のマヤ教会、チチェン・イツァなどの遺跡における観光産業、カルキニ村（メキシコ）の空間認識、ユカタン州（メキシコ）における言語復興活動、国境を越えた労働移動（メキシコおよびグアテマラ）、女性の機織りなどの事例を通じて記述・分析した。

研究成果の概要（英文）：In this study we tried to describe and analyze the possible process of appropriation and re-territorialization by the Mayan peoples of denominated Mayan cultures which have been reshaped for consumption needs in global economy. And we focused on the daily practices of the common Mayans who are not in the privileged position to speak as Mayan in this global political economy. For this purpose we studied the Mayan church in Tulum (Mexico), Mayan economic activities in archaeological sites such as Chichen Itza (Mexico), Mayan lived space in Calkini, (Mexico), Mayan linguistic revitalization in the state of Yucatan (Mexico), international labor migration in Mexico and Guatemala, Mayan women's textile works in Guatemala.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2009年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
年度			
総計	13,000,000	3,900,000	16,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：マヤ、マヤ語復興、観光、領域概念、再領土化、トランスナショナリズム、グローバルイゼーション、日常実践

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は平成14年度から同16年度にかけて実施した科学研究費補助金研究「マヤ・イメージの形成と消費に関する人類学および歴史学的研究」を補完かつ発展させることを意図したものである。

同研究では中米先住民のマヤ民族および文化に関するイメージ（言説を含む）が、植民地支配者はもとより人類学者や歴史学者、考古学者などの研究者、さらには観光客などの他者によってどのように形成され、また消費されてきたのかという点について明らかにした。また、同研究はカルチュラル・スタディーズあるいはポストコロニアル人類学が提起する言説における政治性を再構築することをも重要な課題とした。それは単に、我々研究者の行う研究がマヤ・イメージの形成および流通にいかなる影響を及ぼすかを把握するだけでなく、学術研究という行為やその成果がマヤの人々の存在様式にいかなる影響を及ぼすのか、さらには我々研究者はそこにどのようにコミットすべきかという自省を試みようとするものであった。

この後者の観点から議論を深めていく過程で次の点が新たな課題として浮上した。調査・研究を通じた研究者と研究対象との関わり方はいかなる学問領域においても倫理的問題として常に念頭に置かれるべき問題であるが、ことマヤ研究に関する限り、グアテマラのマヤ復興運動の場合に象徴されるように、それは学問レベルにおいて議論すべき問題であるにとどまらず、研究者はそうしたマヤの人々の運動と実際にいかに関わるべきかという社会的な実践の問題ともなっている。実際、エスニシティを民族の主観的な規定の問題として捉えようとした人類学者は、マヤ復興運動家たちから様々な批判を浴びている。自らの運動を本質主義的な民族性に結びつけようとするマヤ運動家たちはエスニシティの構築主義的な理解に対して異議を唱えたのである。そうしたマヤ運動家の主張に対して多くの人類学者はそれを受け入れ、彼らの主要なインフォーマントであるマヤ知識人を擁護する立場を取っている。たとえば、エドワード・フィッシャーは文化的ロジックという概念を用いて、マヤ運動家たちの運動あるいは個々の活動はマヤ固有の論理に基づいたものであると主張する。また、太田好信は、マヤ復興運動は脱植民地化を実現するための一つの有効な手段であるとの観点から、その運動の可能性の内にマヤ民族および文化の将来を託そうとする。こうした研究姿勢はマヤ運動家の主張における社会的政治的正当性の問題のみに

焦点を合わせがちであるため、実際に語られる「マヤ」とはいかなるものなのか、また語りの主体は誰なのかについての検証が不十分となりがちである。特に、「マヤ」自身による語りが特権化されるあまり、マヤ言説が実際に成型されるプロセスが不透明になりがちである。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、マヤに関する言説が実際に生み出される現場、特に外部社会に対してマヤ言説を語ることをない一般のマヤの人々の日常生活を検討することとした。そもそも、マヤに関する言説は必ずしも他者に対する語りの中にだけ存在するものではない。マヤ言説は外部社会の他者と交渉するためだけでなく、自らの存在を規定したり、社会内的関係を再構築したりするための重要なイデオロギー的、道徳的基盤としても機能する。本研究では、マヤの人々の日常生活レベルにおいて発現するそうした内的なマヤ言説を明らかにしようとした。しかも、その発現は他者によって消費の対象としてグローバル経済の中で脱領土化されたマヤ文化を再領土化しようとするマヤ自身の試みであるとの観点から彼らの日常実践を記述することを目指した。

## 3. 研究の方法

本研究では当初、エスニシティ、ジェンダー、トランスナショナルな労働移動、観光産業、言語復興活動などのテーマを切り口として、歴史学（2人）、文化人類学（4人）、社会学（1人）の各分野から、地域的な広がり（メキシコおよびグアテマラ）を考慮した人員を配置し、参与観察やインタビューを中心とするフィールドワークを行うこととした。また、各年度の調査実施後には情報の交換、調査研究の方法や目的の再検討を目的とした研究会を実施することとした。

## 4. 研究成果

ここではスペースの関係上、マヤ文化の再領土化という現象を検討する上で重要な発見があったものに絞って記しておきたい。

エスニシティを担当した初谷はメキシコ南東部キンタナロー州のトゥルム市でカスタ戦争（1847-1901年）の末裔であるクルソー・マヤたちの宗教的実践に関する調査研究を実施した。初谷はまずマヤ教会の護衛システムと伝統的ノベナに関する詳細な民族誌的記述を行うとともに、調査の際に加えられた制限について考察した。初谷によるとマヤ役職者た

ちは研究者に対してメモ帳、筆記用具、録音機器、カメラおよびビデオなどの情報機器の使用を禁じる。しかし、だからと言って順路的経験をいっしょにすることを拒否することはない。むしろ積極的に参加をうながす。ただし、その順路的経験を地図的知識に整理しようとするそぶりに対しては強い拒絶の態度を示す。初谷は、クルソー・マヤのこのような態度を、情報操作の優劣による他者化を防いだ上で、儀礼への参加は認めることで研究者を他者化することもしないという日常的実践における近代と伝統の境界線上を生きる戦術であると解釈する。また、初谷は同マヤ教会において実践されているミサと呼ばれる祈りの分析から、マヤの人びとは祈り（マヤ語による祈祷）を再-脱領土化（＝市場価値のモニタリング、すなわち祈祷文が「正しい」か否かの確認作業）することなしに、日常的空間に埋め込んでいることをも明らかにした。こうしたクルソー・マヤの日常的な実践を初谷は次のように解釈する。

クルソー・マヤの人々は外部社会から押し付けられたカトリックの祈りをブリコラージュによる模倣と継承を繰り返しながら、自らの日常的実践の資産として再領土化してきた。かれらの日常的実践は、かたくなに伝統を守りながらマヤ文化の復興をはかるといふ本質主義的語りの中に回収されてしまいがちであるが、彼らの祈りの中には、いわゆるマヤ的要素は見あたらない。マヤの人々がときには経験知を、ときには科学的リテラシーを使い分けて、秩序ある条理空間と顔の見えるローカルな日常的平滑空間の両方を生きているとすれば、まごうことのない近代的自我を確立して科学的＝合理的リテラシーのみを駆使して生きていると錯覚している我々が行っていることとさほど変わらないはずである、と。

メキシコ、カンペチェ州のカルキニ村を事例として植民地体制下におけるユカタン・マヤの領域概念に関する研究を行った大越は、マヤ人の領域概念、具体的には拡大家族を単位とする集落空間、及びこれをとりまく彼らの生業空間の分節の仕方がどのように変容していったかについての考察を行った。大越の研究によると、マヤ人は政治・社会空間を対人主義によって規定しており、連続的かつ私有財産制に基づく領土観を持っていなかった。植民地支配以前のマヤ社会は人的関係に基礎を置いていたため、その構成単位に相当の自治権が認められ、結果として潜在的に流動性の高い社会であった。

植民地支配の確立のためスペイン王室はそれまで散在していた先住民集落をスペイン風の街区を持つエプロ（村）に集住させた。大越が調査の対象としたカルキニには 1565年の時点で9村落が集められた。対象となった人口は少なめに見積もっても、6500人であ

る。現地調査を行った結果、カルキニにおける集住は次のような特徴を持っていたことが推測される。①中央部には教会と広場、いくつかの建物以外何もなく、周辺には無人の原が広がっていた。②現在バリオと称される区分は、19世紀末まで *cah* と呼ばれていた独立した政治・社会単位として存在していた。③植民地政府の認めるカルキニ村は、住民にとってはこれらの独立した政治・社会単位としての *cah* の上位区分であった。これらは、先スペイン期の *batabil* が持っていた構造の再創造であると言え、スペイン人によって与えられた空間がマヤ人によって独自に意味付けられ、使用されていたことを示すものだろう。つまり、スペイン風にアレンジされたかに見えるマヤ人の村々は、同時に彼らによって再創造された自分たちの空間＝村であった。

また大越は、古文書の検討から土地の所有に関してマヤの人々は次のような理解をもっていたことを明らかにしている。先住民はスペインの基準に従って改変（脱領土化）された空間で生きていかねばならなかったが、彼らにとって土地（大地）は依然として聖なるものと見なされたため、私有財産（脱領土化された土地）がその所有者に認める絶対的な権利（私有権）に関しては、その行使を認なかった。大越によるとマヤの人々は使用されていない私有地に対する用益権さえ主張し、行使し続けた。たとえ第三者に売却された土地であっても、彼らの間では村の共有地として認識され続けた。土地の脱領土化という現実を受け入れつつも、マヤの人たちがこうした領域概念を持ち続けたことが、植民地時代を通じて土地紛争が絶えなかった原因だ、と大越は主張する。

今日、マヤ社会・マヤ文化は観光産業とは切っても切れないほどの関係にある。この両者の関係に関して杓谷が遺跡利用、また本谷が民芸品としての再利用もある織物からアプローチした。杓谷は主にメキシコ、ユカタン州にあるエク・バラム遺跡とチチェン・イツァ遺跡を主たる研究地として、先住民たちがそれらの遺跡において観光客を対象として展開する自律的な経済活動に注目する研究を行った。

メキシコのユカタン半島東岸北部地域では 1970年代半ばにリゾート地カンクンの開発が国家プロジェクトとして推し進められてきた。その中で、この地域の遺跡公園は世界中から多くの観光客を迎え入れるに至っている。しかし、そこでの観光対象となるはずのマヤ文化の担い手である先住民の存在は、観光産業の中では底辺に置かれたままである。それは先住民が、観光の対象となるマヤ・イメージに「手つかずの自然」というイメージの担い手であることを求められるようになったためであると杓谷は主張する。

そのような巨大な海外資本を背景としたマスツーリズムが支配するこの観光圏において、先住民が自律的な観光事業活動を行うことは極めて困難なことであるのはいうまでもない。杓谷が調査したエク・バラム遺跡では U Nihil Ek Balam という観光宿泊施設が村民の力によって建設され、自律的な運営が行われている。また、チチェン・イツァ遺跡公園内で民芸品を販売することを禁止されていたピステ村の住民は、2006年頃から「自分たちの土地」で商売する権利を主張して、政府の許可なく遺跡内に露天を並べて商売を始めるようになった。杓谷はこうした現象は、先住民が自らの「人間性」を取り戻そうとするささやかな自己主張であると主張する。

他方、本谷は観光地における民芸品としての織物の流通に注目する一方で、それらが実際に生産されるグアテマラにおいて近年、機を織るという行為がどのように変容しているのかをジェンダーとの連関において明らかにしようとした。

本谷が主たる調査地としたナワラでは、双頭の鷲やライオンなどのトゥフと呼ばれる紋様は古来村の為政者や重要な宗教役職者が身につける衣服にのみ織られるものであった。ところが、1950年のハイウェイ建設を皮切りに、近代化の波が村の宗教・政治・経済活動を包括し村の伝統的価値観を払拭していく中、男性の服装は民族衣装からシャツにズボンという洋装へと変わったことにより、これらのトゥフは布を彩るデザインの一つへと変容した。すると、女性たちは織る労力のすべてを自分の衣へ結集し、それまで織ることのできなかったトゥフと村古来のさまざまな紋様を組み合わせ、より「マヤ」らしい華やかな布を作り、それを装い始めた。進歩や発展の名の下にもたらされた変化が伝統社会を席捲していくのとは対照的に、女性の織りと装いの世界にのみ濃密なマヤ的空間が繰り広げられていくのは、「後帯機で布を織る」というマヤとしての営みに、近代が否定する伝統的価値観と近代化がもたらす新たな価値観とがとりこまれていくからである、と本谷は主張する。

こうしてより「マヤ」らしく改編された新たな手織り布が、村の伝統的慣習である布の貸し借りを通じて、女性の織りと装いの世界をさらに再領土化していく。しかも、布を貸してほしいと頼まれれば、それが見知らぬ人であっても自分の村のものであるならばそれを断ってはならないという先人たちの言い伝えに基づいて、見知らぬ村人と布の貸し借りをおこないながら、女性たちは内戦時代の経験による身近な者への根深い不信感を乗り越えているのだ、と本谷は見る。そうした復興への歩みはナワラという一村落の範疇を越え、現在では他村とのあいだにもまた展開されつつあることも本谷は報告している。

他方、民芸品としての織物の消費に関して本谷は次のように報告する。観光市場で売買され、加工業者の手によって民芸品へと作りかえられていく過程で、本来村落間のメタ言語であった布は、適当な大きさに切り刻まれ、カバンやポーチといった観光客の生活様式に見合った商品へと生まれ変わる。すなわち、マヤの人たちの日常生活から脱領土化されたマヤの手織り布は、観光市場が生み出した Mundo Maya (マヤ世界) という新たな世界を象徴するシンボルへと翻訳されていく。しかも、マヤの人々を取り巻くグローバルな経済活動の中で、民芸品の生産・消費はマヤの人々の伝統的なスタイルによる日常的な機織をより活発なものとしている。

一方、桜井は、マヤ文化復興運動の中でマヤ女性たちが民族衣装を織ることと「沈黙のレジスタンス」として民族衣装を着用していることに関して、それはマヤ女性たちが征服者・為政者に対して「消費」されることを意図した生産であると見る。すなわち、征服者によって押しつけられた「民族衣装の文法」を利用することで、マヤ人のアイデンティティの表象として民族衣装着用運動を推進してきたのだと主張する。

労働力の国際移動との関連で桜井と三澤はマヤの人たちの生存戦略とアイデンティティを明らかにしようとした。特に、桜井はグアテマラからアメリカ西海岸へと広がる女性のネットワークを跡付ける中で、彼女らの日常生活において発現するマヤ・アイデンティティとその利用形態について考察した。また、三澤はメキシコ、チアパス州国境地帯のマヤ村落を対象として、グローバル経済の展開が共同体とアイデンティティの再生産に与える影響を村落センサスの分析と聞き取り調査を元に考察した。

三澤が調査した村落では、生存農業を補完する賃金労働が不可欠であり、その構造はアメリカ合衆国への移動が開始して十数年経った今でも変わりはない。送金による消費水準の上昇は明らかであるが、そのことに関連する変化のひとつとして、文化的出自と言語を共有する人々との国境を越えた交流が、以前よりも積極的に、とくに若い世代を中心に行われるようになってきている(たとえば、宗教組織によるミッションの交換とサッカーの交流試合)。三澤の調査によると、こうした動きは、1930年代の強制同化によってマムとしてのアイデンティティを一旦否定されるが、1970年代に登場した多文化主義ディスコースの下で政府による文化救済プログラムが実施されたことで、強制同化とプランテーション労働という経験を根幹にして新たなマムのアイデンティティが構築されたためである。

マヤ語の復興活動を取り上げた吉田は主にメキシコ、ユカタン州を中心に参与観察を行

った。マヤ語復興活動はまだ始まったばかりであり、その成果について論じることは時期尚早であることもあり、調査においてはマヤ語復興活動の現場に携わる活動家（政府系機関の職員やマヤ語教育に携わる教師たち）たちへのインタビューが主たる調査内容であった。そこから明らかになったことは、マヤ語あるいはマヤ文化の復興と言っても、復興すべき言語や文化が自明のものではあるわけではなく、活動家たちの裁量に委ねられている部分が大きいという事実であった。また、マヤ語の教育においてはユカタンの場合スペイン語の知識に依存するところが大きく、またマヤ語のネイティブといえども、マヤ語の文法を理解している人は極めて少ないのが現状である。これはマヤの人々がスペイン語による教育しか受けてこなかったことに加えて、スペイン語の文法範疇によらないマヤ語の文法書ないしは辞書が欠如していることによるものであるため、吉田はマヤ語教育用の教材として文法解説を付した『マヤ語動詞活用辞書』を作成し、マヤ語普及機関に配布した。吉田が作成した文法および辞書が必ずしもマヤ的な思考様式によるものであるかどうかは分からない。それは単にアンチ・スペイン語文法としての「マヤ語」文法であるだけなのかもしれない。いずれにせよ、この新たな辞書を通じてマヤの人々が自分たちのマヤ語およびマヤ語文法をどのように再生していくか（もしかしたら、この辞書が提起する文法は拒否されるかもしれない）は今後注目に値するだろう。その場合、多くのマヤ人にとって、マヤ語で読み書きすること、さらにはマヤ語の文法を理解することは、彼らにとっては全く新たな文化の獲得であり、失われたものの回復ではないことに注意しておく必要がある。

本研究は、現在進行中のマヤ文化に対する社会的再評価ないしはマヤ・アイデンティティの活性化を対象としているが、研究対象となった全ての事例は決してマヤ民族・マヤ文化というひとつのカテゴリーで括ることができるわけではない。むしろ、マヤという民族的・文化的言説の下で生起する様々な先住民族の日常実践を点描したに過ぎない。それらは同時期的、再帰的であるがゆえに、これら個々の実践を汎マヤ的な社会運動とみなすことも不可能ではないかもしれない。だが、それら個々の実践がもたらすそうした社会的、政治的な影響力、およびそれらに対する歴史的評価については、本研究の射程外であり、別の研究に委ねたい。

##### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

1. 初谷譲次、2009、「メキシコ・キンタナロー州トゥルム市マヤ教会の護衛制度と伝統的ノベナー近代と伝統の境界線上を生きるという戦術」、『天理大学学報』、219 輯、123-142 頁、査読無
2. 初谷譲次、2009、「再領土化される祈り—メキシコ・キンタナロー州マヤ教会における日常実践」、『天理大学学報』、222 輯、49-73 頁、査読無
3. 本谷裕子、2009、「グアテマラ・マヤ系先住民の政治意識と政治参加に関する一考察—ナワラ村の事例をもとに」、『慶應の教養学』、219 輯、363-393 頁、査読無
4. 本谷裕子、2009、「Over the rainbow - グアテマラ・マヤ世界探訪記」『三色旗』744 号、16-25 頁、査読無
5. 大越 翼、2009、「時の流れに抗して—三つのマヤ王家の由緒—」、『歴史学研究』、847 号、42-55 頁、査読有
6. Okoshi, Tsubasa. 2009. *Vivir con fronteras: espacios mayas peninsulares del siglo XVI. El territorio maya. Memoria de la Quinta Mesa Redonda de Palenque*. INAH. pp. 137-149. 査読有
7. 桜井三枝子、2009、「グローバル都市ロスアンゼルス、生き残りを賭けて越境するグアテマラとエルサルバドルの人々」、『京都民俗』、第 26 号、127-143 頁、査読無
8. 桜井三枝子、2009、「グローバル都市ロスアンゼルス、アパレル産業に従事する中米系ヒスパニック」、『イベロアメリカ研究』、XXXI(1)、35-50 頁、査読有
9. Shakuya, Shigeki. 2009. *Desarrollo turístico en el área norte de la península de Yucatán y los parques turísticos que “viven” allí. Boletín del Instituto de Estudios Latinoamericanos de Kyoto*, No.9, 21-23 頁、査読無
10. 杓谷茂樹、2009、「ユカタン半島北部の観光開発とマヤ遺跡公園：廃墟から遺跡、そして遺跡公園へ」、『共生の文化研究』、第 3 号、91-96 頁、査読無
11. 吉田栄人、2009、「現代ユカタン・マヤ語の動詞活用に関する形態論的一考察」、『ラテンアメリカ・カリブ研究』、16 号、12-25 頁、査読有

〔学会発表〕（計 7 件）

1. 本谷裕子、「中米グアテマラ・マヤ系先住民の生活文化とアイデンティティ—女性・衣装・住居」、日本建築学会比較居住文化小委員会、2010 年 3 月 27 日、建築会館
2. 杓谷茂樹、「世界遺産としてのマヤ遺跡公園—チチェン・イツァの場合」、天理大学アメリカス学会第 14 回年次大会、2009

- 年 11 月 28 日、天理大学
3. 本谷裕子、「トランスナショナルな「マヤ」イメージの形成とグアテマラの布」、日本ラテンアメリカ学会第 30 回大会、2009 年 6 月 7 日、東京外国語大学
  4. 大越 翼、”La formación del *cuchcabal* de Maní: las interacciones de sus unidades componentes (*cuchteel* y *catabil*) y el ejercicio del poder de los Xiu en el Posclásico terminal.” Wayeb European Mayan Conference、2009 年 11 月 14 日、クラクフ (ポーランド)
  5. 杓谷茂樹、「メキシコの観光振興とマヤ遺跡公園」、日墨交流 400 周年記念シンポジウム第 2 回、2009 年 11 月 14 日、南山大学
  6. 杓谷茂樹、「ユカタン半島北部の観光開発とマヤ遺跡公園」、日墨交流 400 周年記念事業国際フォーラム「メキシコの魅力を探る 世界遺産の古代文明と伝統芸術のルーツ」、2009 年 7 月 10 日、愛知県立大学
  7. 本谷裕子、「グアテマラ・マヤ系先住民の政治意識と政治参加に関する一考察—ナワラ村の事例をもとに」、日本ラテンアメリカ学会第 29 回大会、2008 年 6 月 2 日、筑波大学

〔図書〕(計 4 件)

1. 初谷譲次、2010、『アメリカス世界を生きるマヤ人—向こう岸からのメキシコ史』むさし書房、全 266 頁
2. 大越 翼、2010、「対人主義の表象としての空間概念：植民地時代マヤ先住民の地図から見えるもの」、中村靖子編著『交響するコスモス—人文学・自然科学編「環境からマクロコスモスへ」』上巻、松籟社、136-169 頁
3. 桜井三枝子、2010、「民族衣装のメッセージ性を読み解く」、加藤隆浩編『ラテンアメリカの民衆文化』、行路社、137-161
4. 桜井三枝子、2010、『グローバル化時代を生きるマヤの人々』、明石書店、全 334 頁

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称：  
 発明者：  
 権利者：  
 種類：  
 番号：  
 出願年月日：  
 国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：  
 発明者：  
 権利者：  
 種類：  
 番号：  
 取得年月日：  
 国内外の別：

〔その他〕  
 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 栄人 (YOSHIDA SHIGETO)  
 東北大学・大学院国際文化研究科・准教授  
 研究者番号：10240285

(2) 研究分担者

桜井 三枝子 (SAKURAI MIEKO)  
 大阪経済大学・人間科学部・教授  
 研究者番号：90235226

大越 翼 (OKOSHI TSUBASA)  
 上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：40439336

三澤 健宏 (MISAWA TAKEHIRO)  
 津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：20297112

初谷 譲次 (HATSUTANI JOJI)  
 天理大学・国際文化学部・教授

研究者番号：10180895

杓谷 茂樹 (SHAKUYA SHIGEKI)  
 中部大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：90410654

本谷 裕子 (HONYA YUKO)  
 慶應義塾大学・法学部・准教授

研究者番号：30407134

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：